山寺の人々

（一）

私が氣上りの子と原紙とに、東小の天寺にに行ったのは三月の五日、とはまだ名ばかりで、山ののところにはけ殘りのもあつたし、興天寺へ行つてからも二度ばかりなりの大がつたであつた。の萬金のといつたもあの中の一つであつた。

私達子がつてゐたのはあるさんので、二畳の小さな部であつた。さんのとは何んだかいひれない葉だ。出家のさんに家とかとかがあらうがない。なら草といつて、年を取つたとか、氣だとかいふ場合、寺の行生活にへない達に許された別居のための家であつたのだが、今日ではいも若きも子をへて琴瑟相和する家となつたものである。家庭であるからにはのも、のもかざるを得ないだらう。の朝家とふところは、の間にを設けてあり、（それさへないモダンなものもある）法やがかゝつてゐることである。（これだけは売道でへてゐるやうである）

私達の主人はまだ若い[、]とても[、]ちやきちやきさんであつたが、朝起きると法を着て、寺の事に出しては、一時間そこそこ何か事を取つてゐるやうであつた。しかしの女は勿のこと、自も、特に家から法要でもまれてゐない限り禮するのを見けたことはない。當寺にも五十人ばかりのがゐるが、朝夕の勤行をするものは四人に限られてゐて、あとの四十五人のさんたちは私たちとりのない家生活をんでゐる。朝夕の勤行をする四人といふのはそれぞれ月給をつてゐるたちで、金たるさまに一人、本のさまに一人、に一人、羅に一人といふことになつてゐる。

朝の四時になると、ことことと木のにつれてや眞をへるがえて來るのだが、これは金のが、やつぱりおかみさんのの中から匍ひ出して金へ出て來[た][[1]](#footnote-1)ところなのだ。木のがむとが鳴り、それからは本やなどで鈴や太鼓のや眞やのがえて來て、一しきり境内はかになる。大を撞くのは銀乭といふ小で、この小なかなかひょうきんで器用で、梵唄であれ、であれ何でも出來るといふ至つて重な小だ。

それが一わたり濟むと、本で建庵といふ和のの太鼓のがいて來るのであつた。私は或は一人で、或は子を連れて、あちこちと朝夕の勤行を見てつたが、この建庵さまが一番心で氣をれてゐるやうであつた。はもう七十をしたで、盲目ではあつたが、その貌といひをいひ、を限りに

「南無」

とへるそのの色といひ、また一時間のをへる、兩手を上高くし上げ、に圓をいて五地のをしつゝ

「南無大大西方主無護如來」

と唱へるふるへるといひ、はたで見てゐても、そぞろ心を動かされずにはゐられなかつた。この和さんは、夕方にも一二時間をへるのであつたが、しんとした内で、の太鼓とをいてゐると、に心がんで來るのをえた。

　いことにはこの和さんも、十數年前からをされたさうで、のんでいる草をき込んで見ると、おもの間もさう綺だともいへなかつた。（『京城日報』1940年5月17日）

1. 原文は「出て來る」 [↑](#footnote-ref-1)